



# いわさきちひろ ぼつご50ねん こどものみなさまへ あれこれいのち

2024年3月1日(金)～6月16日(日)

主催：ちひろ美術館 協力：ふじのくに地球環境史ミュージアム

後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区



グラフィックデザイン：岡崎智弘

いわさきちひろの没後50年を迎える今年、自然をキーワードに、ちひろの作品を新たな視点で見て、体験し、考える展覧会を開催します。

## 自然と人とのいまむかし

ちひろは1974年に亡くなるまでの最後の22年を東京の下石神井（現在のちひろ美術館・東京）にある家で暮らし、働きました。この時期はまさに高度経済成長期と呼ばれる時期と重なっており、都内では大規模な土地開発が進み、樹林や農地が宅地へと変貌し、自然が減少していった時期でもありました。ちひろは亡くなる2年前に「どんどん経済が成長してきたその代償に、人間は心の豊かさをだんだん失ってしまうんじゃないかと思います。(……) 私は私の絵本のなかで、いまの日本から失われたいろいろなやさしさや、美しさを描こうと思っています。それを子どもたちに送るのが私の生きがいです。」と語っています。失われたいろいろなやさしさ、美しさのなかには、身近な自然のことも含まれていたのではないかと思います。

自然保護、自然再生の考えも、時代とともに変化してきています。今最も重要な課題は、人と自然との共生である、と本展の企画協力者である鷺谷いづみ氏は述べています。日本も1993年に締結している世界生物多様性条約では、2022年の国際会議において、人と自然が共存できる地球の再生のために、2030年、2050年への目標が設定されています。

ちひろの描いた作品のなかには、数多くの野の草花や生きものも登場します。自然ということばはあまりにも広いのですが、作品に描かれている身近な野の草花や生き物に注目することによって、見

## 企画協力 鷺谷いづみ (東京大学名誉教授/生態学、保全生態学)



理学博士。みどりの学術賞、日本生態学会功労賞などを受賞。筑波大学、東京大学、中央大学で生態学・保全生態学の研究と教育に従事した。主な著書は、『にっぽん自然再生紀行』、『さとやまー生物多様性と生態系模様』、『生物多様性入門』(以上岩波書店)など。

生物多様性条約の世界目標は「自然との共生」。遠い昔からのヒトと自然との共生の場であったのに今はほとんどが失われた「野」。絶滅危惧種を含む野の花やワラビに子どもたちが親しむ情景が描かれた貴重な絵を鑑賞し、実物の植物がつくる小さな空間「共生の庭」で実感していただければと思います。ちひろさんの絵の魅力をひきかたえている紫色は、生態系における植物が動物と共生関係を結ぶために進化させた花や熟した果実の色。赤から青までの濃淡さまざまな紫色を、共生の色として感性と知性で楽しむ展示もできればと思います。



図1 うす紫の帽子の少女 1970年代前半



図2 春の花とこぎつね 1964年

えてくるものが多くあります。

例えば、《春の花とこぎつね》(図2)の主役は手紙をポストに投函しようとしているこぎつねですが、その手前にはそれを隠してしまうほどの大きさで、さまざまな草花が描かれています。右側にはネコヤナギの木、左側にはキブシの花、手前にはハルリンドウ、スマレ、タンポポ、つくしなどが見られます。この絵のなかの植物を見て、鷺谷氏は「50年以上前には、東京区内でも武蔵野の田園で見ることができた在来の野生の花たち」だと述べています。ちひろが見て描いていた自然を、次の世代にも残していく責任が大人たちにはあります。

緑色を背景に、少女がまっすぐこちらを見つめている姿が印象的な少女像は『あかまんまとうげ』の表紙のための作品です(図4)。この絵本には、人が、目に見える形で自然の恵みを得て生きていた世代と、現代(当時)を生きる世代との違いが書かれています。山に住む祖父母の家へ行くことになった孫のかずこ。わらびを取りに行くことになったものの、町育ちの彼女は、最初はどれがわらびなのかもわかりません。しかし、おばあさんといっしょにつむうちに、上手に見つけられるようになっていきます。人と自然との共生を思い出し、取り戻すために、ちひろ美術館・東京の中庭にも、ふきやわらびなど、在来の植物を植



図6 ぶどうとふたりの子ども 1964年頃

え、小さな「共生の庭」として、育てていく予定です。

### 紫の色から見えること

共生とは、ともに生きること。植物や動物、人間も同じいのちとして、お互いに持ちつ持たれつつ、お互いが生き延びる関係は、昔はできていたものの、強くなり過ぎた人間の驕りと、経済優先の工業化社会により、多くの生物や植物が地球上から姿を消そうとしています。共生の関係は、色でも見ることができると鷺谷氏は語ります。「自ら動くことのできない植物は、動物に蜜や果肉などを餌として提供し、花粉や種子の運搬をまかせます。それは、動物は餌を得ることができ、植物は繁殖を成功させることができるwin-winの共生関係です。花や果実の色は、視覚に頼って餌を探し花粉やタネの運び手になる動物にその存在をアピールするため植物が進化させたものです。花や果実にもっとも多く見られる紫は、そんな共生関係を支える『共生の色』なのです。」例えばぶどう。私たちがおいしそう、と思うのは、その色からであり、それによって、ぶどうのタネの運搬がされてきたのです(図6)。

ちひろの描く作品や絵本のなかには、紫を含む赤から青にかけた色がよく使われています。彼女が好んだという紫色。それは生態学的にも人間を含む動物が共通して好んだ色だったのです。

(松方路子)



図7 plaplx On the Stump 2015年



図3 plaplx Water Pocket 2014年



図4 わらびを持つ少女「あかまんまとうげ」(重心社)より 1972年



図5 草むらの小鳥と少女 1971年



図8 plaplx 新作のイメージスケッチ

## いわさきちひろ ぼつご50ねん こどものみなさまへ

ちひろから、いまの子どもと、  
かつての子どものみなさまへ——

絵本画家・いわさきちひろが亡くなって2024年で50年が経ちます。この半世紀の間に、地球環境の急速な変化やデジタル化の加速などによって、世界は大きく変わりました。一方で、戦火が絶えることはなく、今もウクライナやパレスチナで戦争が続いています。未来が見えにくくなっている現代、ちひろの絵は、私たちになにを語りかけてくるのでしょうか。

没後50年を機に、ちひろ美術館（東京・安曇野）では、子どもと、かつて子どもだった大人たちに向けた新たなプロジェクト「こどものみなさまへ」に取り組みます。展覧会ディレクターには、2018年の生誕100年プロジェクト「Life」で、子どもたちが体全体でちひろの世界を楽しむことのできる展覧会「あそぶ」を企画したアートユニット plaplax を迎えました。ちひろの絵をよく知るおふたりとともに、2024年の1年間、ちひろが大切に描いた「あそび」「自然」「平和」のテーマを、科学の目も交えて見つめ直す3つの展覧会を開催します。企画に協力していただいた森口佑介氏（あそび）、鷺谷いづみ氏（自然）、塩瀬隆之氏（平和）には、それぞれの専門分野から、ちひろの絵を読み解く新たな視点を示していただきました。絵を見るだけでなく、子どもも大人も楽しく参加できるように、映像を使ったインタラクティブな作品やワークショップなども取り入れます。見て、参加して、ちひろの世界を楽しみながら、子どもたちの今と未来について考える展覧会です。（上島史子）

## 〈展示予定〉

## ■あ・そ・ぼ

2024年3月1日(金)～6月2日(日)安曇野  
6月22日(土)～10月6日(日)東京  
企画協力：森口佑介（京都大学准教授／発達心理学、認知科学）

## ■あれ これ いのち

3月1日(金)～6月16日(日)東京  
9月7日(土)～12月1日(日)安曇野  
企画協力：鷺谷いづみ（東京大学名誉教授／生態学、保全生態学）

## ■みんな なかまよ

6月8日(土)～9月1日(日)安曇野  
10月12日(土)～2025年1月31日(金)東京  
企画協力：塩瀬隆之（京都大学准教授／システム工学、インクルーシブデザイン）

特設サイト [chihiro.jp/2024kodomo](http://chihiro.jp/2024kodomo)



グラフィックデザイン：岡崎智弘

## 展覧会ディレクター：近森基+小原藍 (plaplax)

インタラクティブな作品制作を軸に、展覧会の展示構成、空間演出、映像コンテンツの企画制作など幅広く活動する。さまざまな手法やメディアを使って、創造的な学びや発見のある体験づくりに取り組む。2018年、「いわさきちひろ生誕100年『Life展』あそぶ plaplax」をちひろ美術館で開催。



無垢な子どもたち、美しい自然、平和への願い。

これらは、ちひろさんが生涯を通して描いたテーマです。

没後50年にあたる1年間、改めてこのテーマと向き合おうとしたとき、＜科学の目＞を通してみることを考えました。とはいえ難しい知識や情報を駆使するわけではありません。目の前のものの“ありのまま”をよく見て受け止め、そこから出発する。科学の目は、特別な人が難しいことを考えるためのものではなく、だれもが見慣れた風景を、新たな発見にあふれた豊かな世界に変化させるまなざしだと思ったのです。本来子どもたちは、そんな風に世界を見つめているかもしれません。

会場で作品を見たり触れたり、体を動かしたり。子どもも大人も「わあ！これはなんだ？」とわいわいっしょになって進んでいく。そんな展覧会のあり方を目指しました。

「ちひろ美術館セレクション 2010→2021日本の絵本展」関連イベント

文化庁 令和5年度 Innovate MUSEUM 事業

2023年10月8日(日)対談「村上康成×はたこうしろう —いま、絵本でつたえたいこと—」

安曇野と東京両館で開催した「ちひろ美術館セレクション 2010→2021日本の絵本展」では、出展作家の声を届けるため、5組の作家のインタビュー動画を特設サイトで配信しました。また、関連イベントとして村上康成さんとはたこうしろうさんの対談を練馬区立石神井図書館で開催しました。読み聞かせを交え、絵本に込めた想いを語ってくださいました。その一部を紹介します。(原島 恵)

### 絵本『まっている。』

**村上：**今の日本はみんなが急ぎ早に走っていると思うんです。電車に乗ればスマホを、机に向かえばパソコンで、息が詰まる感じがします。この絵本では、それに対して「ちょっと待てよ」という思いで、待つというテーマを深めました。

**はた：**今の流行りのことばに“タイパ”というのがあって、なんのことかと思ったら、タイムパフォーマンス、つまり経済効率のことなんです。じっとしていたり、ぼうっと考えたりする時間の豊かさを、みんな忘れてるんじゃないかな。

**村上：**すぐに答えを求めちゃうんだよね……。わーっと押し寄せる時代の奔流の脇で、僕なんか、ただただ岸辺で立ちつくしてる。自分が発した波動が相手に伝わって、こちらに返ってくるまでの間に漂っているよるこびってあると思うんです。それをまったく非効率なものとして切り捨てていいんですか？待っているってもったいないと思いますか？と問いかけたいですね。『まっている。』では自然界の生きものたちと重ねて、そんな時間の豊かさを、あらためて描いてみたわけです。でも、絵本はあくまでも問いかけですからね。こうあるべきという答えがあるわけじゃない。読んだ人がそれぞれに考えてくれればいい。

**はた：**村上さんはどんなときに絵本のアイデアを思いつきますか？僕は考えようと思っても出てこなくて、だいたい待ち時間や歩いているときに思いつきます。

**村上：**ああでもない、こうでもないという時間なんだよね。それがだんだん熟成されるんだよね。やがてボンと出てくるタイミング、ですね。先日テレビで、今のタイパの時代に“ネガティブ・ケイパビリティ”が見直されているという特集番組を見ました。イギリスの詩人キーツが記したことばなんだけど、裏側の能力みたいなことです。テキパキものごとを進めるのが得意なグループとそうでないグループに分けて実験を行ったんですよ。テキパキグループは課題に対して、すぐにスマホを取り出して検索して、あ

っという間に答えがまとまっちゃいました。一方のモヤモヤグループは雑談しながら、なかなか本題に入らない。結果、時間は何倍もかかったけど、モヤモヤグループの方が歴然と深い答えを導いたんだよね。それを見て安心したんです。自然界も人間社会も、黒と白で考えるんじゃなくて、間のグレーゾーンが必要なんだとね。

**はた：**最近すごく世知辛いというか、ちょっとルールから外れると批判されたり、国全体がそんな風になっているような感じがします。30年位前はもう少しいい加減で、その分豊かだったように思う。

**村上：**本当にそうだよ。付度してどんどんお利口さんになっていくっていう感じ。人間の緩さみたいなものが失われているような気がします。

### 絵本『あなたがおとなになったとき』



**はた：**この絵本は湯本香樹実さんの詩をもとに描きました。詩を読んで、未来について語る絵本にしようと思ったんです。僕は中学生くらいで絵本作家になりたいと思ったんだけど、まわりにイラストレーターや画家がいなかったから、本当にそんな仕事に就けるか不安でいっぱいでした。その不安は全部想像の世界なんです。昆虫も好きで、中学のころ、山や河川敷で虫を探してたんですよ。未来のことを考えると憂いが出てくるけれど、足元の自然や毎日の学校生活をひとつずつ見つめるとキラキラしている。そのことを伝えたいと思ったんです。絵本の前半は不安な気持ちを表現して廃墟なんかを描いてるんですけど、後半、最後のところは朝の通学シーンで日常の現実を感じてほしいと思って構成しました。

**村上：**文章と絵が別々に進んでいくクロスオーバーがかっこいいと思いました。湯本さんとは打合せをしたんですか？

**はた：**詩の世界は完成されているので、説明的に描くと陳腐なものになっちゃうじゃないですか。だから、詩と平行して僕のほうでも物語をつくらないとダメだと思いました。湯本さんとは打ち合わせず、ラフを見てもらって、特に修正の注文はなかったと思います。逆に僕が勘違いしたところがあって。

**村上：**勘違い？

**はた：**はい。最後から2番目の朝の通学

シーンなんだけど、僕はここに文章が入るつもりで描いていて、文章は入らないんですか？と聞いたら、湯本さんは受け止めてくれて、最後に一文「耳を澄まして」と追加で入れてくれたはったんです。

**村上：**この一行が効いてますよね。まさに共作絵本のよいところですね。はたさんは、この絵本で背景を絵の具で描き、人物はヤングアダルトが好みそうなキャラクター的な要素を入れて鉛筆で描いて、組み合わせたり工夫してますよね。

**はた：**そうです。紙に描いたものをスキャンし合成して、ページを追うごとに紙に描く部分の割合を増やしていき、最後の2場面は1枚紙全部が手描きというコンセプトを自分に課しました。読み手は気づかないかもしれないけれど、不安な想像の世界から現実に向き合う過程を、なんとなく感じてほしいなと思って。

**村上：**気配が感じられますよね。

### 肌感覚を大切にしてほしい

**はた：**話は少し違うけれど、アナログ盤のレコードには、人の耳には聴こえない周波数が入っているらしいです。それがCDではカットされて、どちらも同じように聴こえるけれど、脳波を測るとアナログ盤を聴いたときだけシータ波が出るらしい。つまり人間は耳ではないところでも音楽を聴いているんですね。多分、視覚的なものも同じだと思うんです。なんぼきれいな印刷物より、原画って感じるものがあるじゃないですか。デジタルだとドットしか見えない。でも現実の葉っぱ1枚でも、拡大すれば細胞まで見える。そこが圧倒的に違うと思うんです。

**村上：**毛穴から感じ取るような感覚って大事だよ。はたさんもいうように、せめて子どもたちには、憂いているときでも、足元には昆虫がいて、自然はそこにちゃんとあるって気配を感じてほしいですよ。僕はそういうことが絵本でできると思ってます。最近『黄色い竜』という児童文学で、その肌感覚を書きました。稲作文化を根底において、田植えから収穫の秋までに起こる少年たちのドラマと、コメの生育や動植物の成り立ちを伏線的に重ねて書いたんです。子どもたちよ、遊べ！と想いを込めて。デジタルの情報だけでは満たされないと思うんです。はたさんの『どしゃぶり』にも同じような感覚がありますね。絵本の世界は、みなさんのそばにいきいきとありますよということを伝えたいですね。どんな世の中になっても、みずみずしいものがそこにあるんだということをこれからも届けていきたいと思っています。

## 「みる・よむ・体験する」ねりまフォーラム事業 2023年度の活動報告

実行委員会：ちひろ美術館・東京 練馬区立美術館 練馬区立石神井図書館・貫井図書館・南田中図書館  
特定非営利活動法人 手をつなご ねりま若者サポートステーション

文化庁 令和5年度 Innovate MUSEUM 事業

今年で3年目となる「みる・よむ・体験する」ねりまフォーラムは、ちひろ美術館・東京を中核館として、練馬区立美術館、練馬区立石神井図書館、同南田中図書館、同貫井図書館、子育て支援NPO法人手をつなご、若者就労支援NPO法人ねりま若者サポートステーションという地域で活動する美術館、図書館、事業所が協同して実行委員会をつくり、それぞれの特性をいかしながら文化芸術活動を中心とした地域活性化事業に取り組みました。

昨年から継続して、文化や芸術の場を利用しづらい方たちが参加しやすい環境を整えることを目標に掲げ、さらに対象を広げ、学びを深めました。今年度の活動の一部を以下に紹介します。(原島 恵)

## 【インクルーシブデザインからの学び】

2023年7月12日(水)、9月22日(金)、12月4日(月)

今年度は、活動の指針のひとつとしてインクルーシブデザインの手法を学びました。NPO法人Collableの山田小百合氏を講師に迎えて講義を受けたあと、ちひろ美術館と石神井図書館を会場にそれぞれワークショップを行いました。美術館では、新たな気づきをもたらす役割のリードユーザーとして、視覚に障がいをお持ちの方、車いすユーザー、外国語を母語とする親子とともに、スタッフが3つのグループに分かれて館内をめぐり、その後、気づきを共有する時間を持ちました。ユーザーにとっての心地よい距離感や、移動するペース、空間の使い方がそれぞれに異なることがわかりました。館内に配置した椅子の位置を移動するなど、具体的な改善にもつながりました。



図書館では、ディスレクシア(文字の読みや書きに困難を抱えている方)の当事者をご家族をリードユーザーに迎えて、いっしょに館内をめぐり本を選んで借りたあと、気づきを共有しました。設備などすぐに改善が難しいこともありますが、情報を得るにはさまざまな方法があることを図書館から発信していく必要を感じました。困難を感じている方たちをパートナーとして情報を届ける姿勢が大切であることを共有しました。

## 【子育てのひろば】

9月15日(金)、11月10日(金)

練馬区で地域の子育てを応援しているNPO法人手をつなごがちひろ美術館に出張して「子育てのひろば」を開催しました。10時から15時まで、たくさんのおもちゃを用意して、経験豊富な保育専門スタッフが常駐するなか、9月には4組、11月には7組の乳幼児と保護者の方が利用しました。保育スタッフに子育ての相談をしたり、参加者同士で交流する姿も見られました。今までちひろ美術館を知らなかったという方や、初めて来館された方もいらっしゃいました。こうした催しが、気兼ねなく美術に親しむきっかけになることを願います。

## 【アートトリップ】10月27日(金)



アーツライブ代表の林容子氏を講師に、認知症や高齢の方とその家族を対象にグループで行う対話型アート鑑賞プログラム「アートトリップ」を開催しました。ちひろの絵を囲み、細かな部分にも注目しながら感じたことを話し合ううちに、最初はことばが少なかつたみなさんの表情がいきいきと変わっていききました。久々の親子での外出という方もいらして、ご家族の明るい表情も印象的でした。

## 【障がいのある方のための鑑賞会】

11月27日(月)



ちひろ美術館の休館日に、障がいのある方と介添えの方を対象とした鑑賞会を開催しました。午前と午後それぞれ5組の方が来館しました。参加者は6歳から70代まで幅広い年齢層の方たちで、奈良や群馬など遠方からお越しの方もいて、こうした機会が求められていることを感じました。参加者は、アート・コミュニケーションをとりながら展示室で絵を鑑賞したり、図書室やショップを利用するなど1

時間ほど館内で過ごしました。「ちひろさんのやさしく強い絵に励まされた」という感想が寄せられました。

## 【手話通訳つきギャラリートーク】

12月9日(土)、12月16日(土)

練馬区立美術館で開催していた[生涯120年古賀忠雄展 塑造(像)の楽しみ]と、ちひろ美術館・東京で開催していた[ちひろ美術館セレクション 2010→2021日本の絵本展]の手話通訳つきギャラリートークを各館で開催しました。事前に両館の学芸員が合同で手話通訳者と打ち合わせをして、解説の内容を伝えました。当日は解説をする学芸員と通訳者の立ち位置を確認し、理解しやすいよう作品図版や作家名などのパネルも用意しました。手話通訳者のアドバイスで受付に筆談ボードを用意したり、親しみやすいように冒頭に簡単な手話を取り入れたり、手話通訳の前後に作品を見る時間を十分に設けたり、解説を話し始めるときには手を挙げて注目を集めるなど工夫しました。ちひろ美術館には、聾学校に通っている小学生や、この機会に京都から来たという方も参加されました。



また、同時期にちひろ美術館の成り立ちや館内を紹介する手話通訳つきの動画を制作してYouTubeで公開しました\*。これらの取り組みは、私たち自身が聴覚障がいをお持ちの方たちの文化について理解を深めるきっかけにもなりました。

## 【美術館カードで絵をたのしもう】

2024年1月6日(土)、1月20日(土)、1月21日(日)

若者の就業支援を行っている、ねりま若者サポートステーションに通う有志の若者たちと、ちひろ美術館と練馬区立美術館の学芸員、南田中図書館の職員が協働して、ふたつの美術館の所蔵品カードを使ってワークショップを行いました。若者たちが進行役を務め、参加者に詩からイメージする絵を数点選んでもらって、その理由を発表してもらうなど、参加者が和やかに交流しました。「美術館で見るのとはまた違って絵を楽しめた」「若者たちの一生懸命な姿に好感を持った」などの意見が寄せられました。

# ひとこと ふたこと みこと

**11月24日(金)**  
新しくできた友人のサナエに連れられて訪れました。なんてすてきなところなのでしょう。繊細でいきいきとした美しさにあふれています。世界中にこういう場所が必要です！(アンナ、オランダ)(原文は英語)

**11月26日(日)**  
初めてこの美術館に来て心がおだやかになりました。昔から好きだったちひろさんの絵をこんなにたくさん見られ、とてもうれしいです。最近は学校生活もうまくいってなくて悩んでいたけれど、今日ここにきてなんだか元気が出ました！また来たいです。(Y.A.)

**12月2日(土)**  
初めてちひろ美術館にきました。明るい館内に作品がいっぱいで感

激しました。ちひろさんや黒柳徹子さんにお会いできたようなあたたかい気持ちになりました。また来たいです。(64才 渡辺明子)

**12月5日(火)**  
20歳のときに初めて訪れ、今回2回目です。誕生日を迎えてすぐおうかがいしたあのころ、10代でなくなる悲しさや不安、高校時代のような楽しいことはこの先もうないのでと感じていた私に「大人になること」のちひろさんのことばが心に刺さりました。このことばのおかげで年齢を重ねても楽しいことがあることに気づき、毎年前向きな気持ちになれています。

**12月19日(火)**  
最近では大学の講義でiPadを使った授業ばかりで、本離れ、活字離れしていました。だからこそ絵本

が新鮮で懐かしい気持ちになりました。想像を動かせるのもよいです。もっとこれから触れていきたい。また来たいです。(沙耶)

**12月21日(木)**  
韓国人が来ましたよ！じっくりと見させてもらいました。作家さんたちどなたもみな味わいがあり、すてきです。(J)(原文は韓国語)

**2024年1月2日(火)**  
元日から地震が起こり災害に遭われた方を思うと心が落ち着かなくここにきました。戦争の準備にお金を使うのではなく、国の基盤の整備に力を注いでほしいと切に思っています。どうぞよい年となりますように。くらしが少しでもよい方向になりますように。世界が平和になりますように。想いはちひろさんと同じです。(FUSAE.O)



# 美術館 日記

**2023年10月3日(火)☀のち♡**  
お父さまの遺品のなかにちひろ作品を発見した、とご連絡をいただく。拝見すると、これまで当館でも把握していなかった1950年代前半の貴重な作品と判明。阪神淡路大震災もくぐり抜け、大切に保管してくだ



さっていたことに深く感謝。同日、『続 窓ぎわのトットちゃん』(黒柳徹子著/いわさきちひろ絵/講談社)が刊行。初版5万部の予定だったが、予約注文の殺到で発売前から5万部の重版が決定。当館ショップ発注分も、瞬く間に売り切れた。「続編のお話は前からありましたが、一番大きいのはウクライナの問題。子どもた

ちはどうしているのだろうと思った時、子どもの自分が戦争の時にどうだったか、もう少し書こう」と、黒柳徹子館長は語った。\*安曇野ちひろ美術館だよりNo.113 p.4参照

**10月7日(土)☀**  
夏に安曇野館で開催した「ちひろ美術館セレクション 2010→2021 日本の絵本展」が東京館でも開幕。初日から館内がたくさんのお客さまでにぎわう。夕方には、出版作家、編集者、絵本関係のみなさんをお招きし、3年ぶりに内覧会を開催した。

**10月17日(火)☀**  
初めての取り組みとなる手話通訳つき動画の撮影現場を見学。日本語と日本語には、語彙・文法ともに大きな違いがあるため、制作会社の方が何度も打ち合わせて台本を翻訳してくださった。表情豊

かな手話表現に見入ってしまう。



\*完成した動画はこちら→  
**10月31日(火)☀時々☀**  
原水協、ちひろ普及会との合同カレンダー会議。紙不足、資源の価格高騰など課題はあるが、1年を通じてお楽しみいただける美しい印刷でお届けするにはどうすればよいか。また世界での戦争や紛争で幼い子どもを含む多くの市民が犠牲になっている今こそ、ちひろの絵を通して平和への願いを広げたい、と熱い思いを語り合う。

**2024年1月23日(火)☀**  
ちひろ没後50年となる2024年のスタートにあたり、両館職員研修をオンライン開催。生前のちひろを知る平山知子評議員の講義や各職員からの発表を通して、各館の最新情報や課題を共有した。



# 新収蔵 作品紹介⑦

伊藤秀男

『海の夏』(ほるぷ出版) 1991年

『けんかのきもち』(ポプラ社) 柴田愛子・文 2001年

昨年、伊藤秀男(1950-)の代表作である絵本『海の夏』(図1)と『けんかのきもち』(図2)の全原画と自筆原稿などの資料が新たに収蔵されました。

伊藤は1976年以降、名古屋や東京など各地で個展を開き、1981年に『じぞうぼん』(福音館書店)で絵本デビュー、現在まで精力的に創作活動を続けています。

『海の夏』は、1991年にほるぷ



図1 『海の夏』より 1991年

出版より刊行された「イメージの森」シリーズの1冊です。同シリーズは、読者を子どもに限定せず、大人の感性をも刺激する新鮮で多彩なイメージを喚起する新たな絵本づくりを目指して企画されました。伊藤は、自身の娘「海」が過ごしたひと夏をテーマに、近所の寺や学校を舞台にして、ダイナミックな筆致で生命力あふれる夏をとらえています。本作で1992年小学館絵画賞を受賞しました。

2001年に発表された『けんかのきもち』は、けんかを通して友だちとの心の交流を描いた作品です。主人公の男の子「たい」は、一番の仲良しの「こうた」と取っ組み合いのけんかをしてしまい



図2 『けんかのきもち』より 2001年

す。こうたがあやまりに来て、けんかの気持ちはおさまりませぬ。伊藤は、実在の保育園をモデルに、ネパール産の素朴な紙の風合いを生かしながら、アクリル絵の具で子どもたちの表情をいきいきと描き出しました。地面に転がる場面では、画面いっぱいに俯瞰でとらえた構図で、動きを躍動的に表現しています。2002年日本絵本賞大賞を受賞し、高い評価を得ています。(山田実穂)

●次回展示予定 2024年6月22日(土)～10月6日(日)  
いわさきちひろ ぼつご50ねん こどものみなさまへ あ・そ・ぼ



いわさきちひろ 絵をかく女の子 1970年

ちひろの絵のなかの子どもたちは、なんでもあそびにしています。ぬいぐるみを友だちにする子、雨の日に水たまりであそぶ子、そうじまであそびとして楽しんでいる子もいます。子どもはあそびながら、世界を探索し、知識を獲得していきます。本展では、美術館で絵を見ることを「あそび」にします。アートユニット plaplapx によるインタラクティブな作品に加え、発達心理学の視点からもちひろの絵を読み解きます。子どもも、かつて子どもだった大人も、のびのびとちひろの世界を楽しむことができると同時に、あらためて子どもやあそびについて知り、子どもの今と未来について考える展覧会です。

ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。TEL.03-3995-0612 chihiro.jp

Facebook, X, Instagram icons

〈展示関連イベント〉

●講演と交流の集い「絵でつなぐ自然との共生」



- 日時：4月21日(日) 14:00～16:00  
\*オンラインでも配信予定
- 講師・コーディネーター：鷺谷いづみ(東京大学名誉教授、理学博士)
- 参加費：500円
- 定員：30名(会場)、オンラインは定員なし
- 申し込み：要事前予約(3/21より公式サイト、TEL.にて)
- 協力：WWF ジャパン

●ワークショップ

- 日時：5月12日(日)
  - 講師：岩田とも子(アーティスト)
  - 申し込み：要事前予約(4/12より公式サイト、TEL.にて)
- 詳細は決まり次第公式サイトにてご案内します。



いわさきちひろ わらびをつむ少女 1972年

〈会期中のイベント〉

●松本猛ギャラリートーク

ちひろの息子である松本猛が、作品にまつわるエピソードなどをお話しします。

- 日時：3月31日(日) 14:00～14:30
- 講師：松本猛(ちひろ美術館常任顧問)
- 参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要(参加自由)

●わらべうたあそび

リズムにあわせて体を動かしたり、声を出して歌ったり。物語への入り口となる「わらべうた」を親子で楽しみましょう。

- 日時：4月6日(土) 11:00～11:40
- 講師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰)
- 参加費：無料(入館料別) ○対象：0～2歳児と保護者
- 定員：8組
- 申し込み：要事前予約(3/6より公式サイト、TEL.にて)



●国際博物館の日 たてももの庭・探検ツアー

- 日時：5月18日(土) 11:00～11:30/13:00～13:30
- 参加費：無料(入館料別) ○定員：各回15名
- 申し込み：当日受付

●ギャラリートーク

- 日時：毎月第1・3土曜日 14:00～14:30
- 参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要(参加自由)

●絵本のじかん

- 日時：毎月第2・4土曜日 11:00～11:30
- 参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要(参加自由)
- 協力：NCBN(ねりま子どもと本ネットワーク)

〈入館料改定のお知らせ〉

ちひろ美術館では、2024年3月1日より、入館料を下記の通りに改定いたします。今後もより充実した展覧会の開催と美術館活動に努めてまいります。何卒、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

○ちひろ美術館(東京・安曇野)

大人1200円/18歳以下・高校生以下無料  
団体(東京館は有料入館者10名以上/安曇野館は有料入館者15名以上)、65歳以上、学生の方、18歳以下の方に同伴する保護者(子ども1名につき2名まで)は900円/障害者手帳をご提示の方とその介添えの方1名は無料/年間パスポート3000円

CONTENTS 〈展示紹介〉いわさきちひろ ぼつご50ねん こどものみなさまへ あれこれいのち…②③/いわさきちひろ ぼつご50ねん こどものみなさまへ…④ 〈活動報告〉対談 村上康成×はたこうしろう…⑤/「みる・よむ・体験する」ねりまフォーラム事業2023年度報告…⑥/ひとことふたことみこと/美術館日記/新収蔵作品紹介…⑦

美術館だより No.220 発行2024年2月19日